『蜻蛉日記』上巻の兼家の求婚と『うつほ物語』あて宮求婚譚
―付・『蜻蛉日記』下巻の遠度の求婚―

堤　和博

はじめに

新典社新書『和歌を力に生きる―道綱母と蜻蛉日記―』[1]などで、『蜻蛉日記』上巻前半部に関して、次のような読みを示した。

和歌に拘って生きる道綱母は、正統な古今調の修辞技巧で彩られた和歌を遣り取りすることで兼家との愛情を確認したい、それも、当時の慣習からして当然のこととして兼家の贈歌で始まる贈答歌の成立で愛情確認をしたいという願いを抱いていたが、結婚成立後は兼家から和歌が贈られてくることは稀になり、このような願いは成就することなく崩壊に向かっていく有様が、上巻前半部には描かれている。[2]

上巻前半部に対するこのような読み取りを念頭に置いて、左に引用した『蜻蛉日記』[3]上巻序文直後の兼家からの求婚場面を分析する考察を昨今続けている。[4]

さて、あはつけかりしすきごとどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりより、かくいはせむと思ふことあり

けり。例の人は、案内するたより、もしは、なま女などして、いはすることこそあれ、これは、親とおぼしき人に、たはぶれにも、まめやかにも、ほのめかししに、「便なきこと」といひつるをも、知らず顔に、馬にはひ乗りたる人して、打ちたゝかす。「誰」などいはするにはおぼつかなからずさわいだれば、もてわづらひ、取り入れて、持て騒ぐ。見れば、紙なども例のやうにもあらず、いたらぬ所なしと聞き古したる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。ありけることは、

音にのみ聞けば悲しなほとゝぎすこと語らはむと思ふこゝろあり

とばかりぞある。「いかに。返りごとは、すべくやある」など、さだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」と、かしこまりて、書かすれば、

語らはむ人なき里にほとゝぎすかひなかるべき声な古しそ

そして、この求婚場面に関して次のような考えを持つに至った。道綱母には、物語に描かれているような形で兼家から求婚歌が届けられて求婚歌も満足できる出来映えである筈だという求婚歌を巡る期待があった。なのに、その期待は叶えられなかった。ここには、そんな顚末が描かれていると認められる。結局この場面は、新典社新書で読み取った結婚成立以降に展開する上巻前半部の内容を象徴的に先取りする役割、言わば上巻前半部の「序段」の役割を果たしている。

この考えの中で、道綱母は通説通り兼家の求婚方法には不満であったと想定しているのであるが、それは、新典社新書でも読み取った上巻前半部の内容から分かるように、若き日の道綱母は和歌に強い拘りを抱いていたと共に物語を耽読し物語世界に憧れていたであろうと考えているからである。つまり、序文を読んで次のように述べる神野藤昭夫[5]の理解が重要なのである。

ここは作者の言い草にかかわらず、物語に親炙し、物語にどっぷり身を浸し、物語を眼として〈世の中〉を夢見

ていた若き日の作者を想定しつつ読むのでなくてはなるまい。どこかで物語に裏切られた作者の、物語的現実と、彼女がたどっていまある〈ものはかなき〉現在とを対置したところで奔出してくる情念を読みとるのである。物語との緊張対比は、深いところから由来する。

兼家からの求婚場面が上巻前半部の「序段」の役割を持っているという私の考えに関連するところでは、神野藤は次のようにも述べている。

たとえば「例の人は、案内するたより、もしはなま女などして、言はすることこそあれ」という。「例の人」というとき、単なる世間常識が言及されているとは思えない。物語的常識、物語的期待の底流がこうコメントせざるをえなかったのだ。それなのに「親とおぼしき人に」直接交渉のうえ、「馬にはひ乗りたる人して、うちたたかす」ありさま。文を取り入れて「見れば、紙なども例のやうにあらず、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき」と思うのである。兼家の手跡は綺麗だと聞いていたがじっさいのところは、というようなことではなく、紙をととのえ、隅々まで配慮して書くのが懸想文と思っていたのに、現実には物語のようには運ばないのだったと、裏切られた口調でこの一節は語られているのであった。

このように考えられる、いや、考えなくてはならないと私は思っているのだが、では、道綱母は具体的にどのような物語を耽読していたのかというと勿論杳として知れない。かつては『三宝絵詞』序文で言及されている類いの物語が取り沙汰されることもあったが、あのような荒唐無稽或いは軽佻浮薄なものではなく、もっと現実的な物語を考えるべきだというのが現在の大方の見方だと思う。(6)

そこで本稿では一つの試みをしたい。それは、道綱母も読んでいた可能性が指摘できる『うつほ物語』藤原の君の巻(7)のあて宮求婚譚を取り上げて道綱母が物語を読んで抱いていた夢や期待と繋げて考えてみるのである。神野藤の言葉で言えば、当時の道綱母の意識の中に見出している「物語的常識、

物語的期待の底流」を少しでも具体的に把握し、先に引いた求婚場面の波線部に道綱母が不満であった所以を考える試みである（その他の兼家のやり方や姿勢に不満であったのは当然と言えるであろう）。

勿論『うつほ物語』を検討して参考にすると言っても問題は多い。最大の問題は、道綱母が『うつほ物語』を読んでいたとしても『うつほ物語』には複雑な成立過程があるので、どんな形の『うつほ物語』を読んでいたのか、厳密にはそれを明らかにしなければならないところであろう。が、たとえ道綱母が現存する『うつほ物語』藤原の君の巻から直接の影響を受けていなくとも、同様の求婚場面を含む散佚物語などから影響を受けていたと考えてよいであろうと思う次第である。

一　『うつほ物語』藤原の君の巻のあて宮求婚譚

あて宮求婚譚をみていくにあたり、まず基本的な点として、最終的にあて宮と結婚する春宮を含めて十一人登場するあて宮への求婚者のうち、仲介を介さずにあて宮に求婚する者が四人いる点を押さえておく。このうち三奇人の一人であて宮略奪を敢行する上野宮を除く三人、即ち、仲澄・兵部卿宮・三の宮（忠康）はそれぞれあて宮の、実兄・母方の叔父・甥という近い血縁者であり、そのために例外的に仲介を介さないのだと考えられている。[8] このことからしても、本人に申し込む際には仲介を介するのがやはり普通であるのは間違いない。

そういうこともあってあて宮求婚譚では仲介の活躍が目立つのだが、仲介を介して本人に申し込む者の中に、兼家が倫寧に申し入れたようにあて宮の父親源正頼に申し入れることを考えないでもない者が二三人いるので、それを参考にして、父親に申し入れることがどう捉えられていたのかを中心に考察してみる。

まずは正頼の甥であて宮には従兄弟にあたる源実忠である。[9]

……このあて宮に御心つきたまひて、いかで聞こえむと思せど、父おとどに聞こえたまふとも、許されたまふまじく、忍びてあて宮に聞こえたまはむも、すずろなるべければ、思ほしわづらひて、ただ、民部卿の殿の御方に聞こえむと思しわたるに、あて宮の御乳母子、かたちも清げに心ばへある人、兵衛の君とてさぶらふに語らひつきたまひて、……（波線は父親への申し入れに関する記述、傍点は仲介者。以下同じ）

後半部分からみると、実忠は、兄の実正（「民部卿」）の妻で正頼の七の君である「民部卿の殿の御方」を仲介にしてあて宮に求婚しようとしているうちに「あて宮の御乳母子」の「兵衛の君」を仲介にすることができて本人に求婚している。ただ、二重線部からすると、仲介を探す前にはこっそりとあて宮に直接申し込もうとも考えたがそれははしたないので躊躇したという。先に確認した兵部卿宮らの例からすると、実忠も直接本人に申し込める血縁者になる筈なのだが、たとえそうであっても、本人に申し込むにあたっては仲介を求める方がよいとの認識があったのがうかがえるのをまずは確認しておく。

それで、父親への申し入れという件からすると注目すべきは波線部で、実忠は、兼家と同じように正頼に申し入れることを真っ先に考えたらしいのである。また、正頼には許して貰えそうにないので次にあて宮への求婚を考えたという語りぶりであるから、正頼から許しが得られればそれでよかったみたいである。そうすると、本人への求婚より父親に申し入れることを優先していることになるが、そんなふうに考えるのは、やはり実忠が正頼・あて宮の近い血縁者であるからこそであろう。反対に言えば、兼家のように本人・父親と血縁にはない者が父親に申し入れるのは常識外であることを思わせる例になるのではないか。

とにかく一例だけでは覚束ないので、次の例をみてみる。次は正頼の妻の一人である大い殿の異母兄弟の藤原兼雅であ

る。

このぬし、あて宮をいかでと思す。父おとどよき御仲なり。されど親には聞こえたまはで、あて宮に聞こえたまふべきことを思ひおはすに、左大将殿の中将、この御つかさの中将なりけり、御仲いとよく語らひたまひて、殿にもろともにものしたまひて、遊びなどしたまふついでに、……

波線部からすると、兼雅は正頼と「よき御仲」なのだから正頼へ申し入れをすればよいのになぜかそれはしないで、と語り手は考えていると読み取れよう。よって、語り手の見解に従えば、父親と「よき御仲」であれば父親に申し入れるのは何ら不思議でないことになる。しかし、兼雅は実忠のように正頼と血縁関係にあるわけではないが姻戚関係にはあり、それが父親へ申し入れをなせる条件であったとも思える。いずれにせよ、語り手ではなくて兼雅本人の意向を考えてみると、父親に申し入れることは当初から念頭にないようで、自分の部下である「左大将殿の中将」（正頼の三男祐澄）を仲介にしてあて宮に求婚しているのである。この兼雅の判断によれば、兼雅のような立場（父親と仲がよいか父親と姻戚関係、或いはその両方）で父親に申し入れることは、少なくとも遠慮されることなのであろう。

次に三奇人に目を移したい。三奇人のうち最も常識から遠いのは上野宮で、正頼にもあて宮にも直接結婚を申し込んでいるようだが、当然全く相手にされずに笑いものにされるだけである。よって、上野宮は参考にはならない。上野宮と対極にあるのは三春高基で、宮内の君を仲介にしてあて宮に求婚しようとしている。この点高基は奇人にしては常識的な行動に出ていて、これもあまり参考にはならない。問題は滋野真菅で、真菅を巡る顚末は、奇人ながらある程度参考にできると考えるのである。

真菅も結局は仲介を介してあて宮に手紙を送るが、最初「あて宮を聞きつけて、いかでと思ふ。ついでなくてえ聞こえぬ」

という状況にあるのを聞きつけてきた近隣の「嫗」[10]に対し「父ぬしに請ひまつらむと思ふ」と言っている。さらに同席する息子の坊の帯刀にも「かの父ぬしは、ものはさぶらふべきとせざりしぬしぞ。さればせしめぬなり。真菅らがせうもち贈らしめて、仲媒に脇差らうちして、請はしめむ。」と言う。「脇差」を贈って懐柔した「仲媒」を介して父親に「せうもち」[11]を贈り、結婚を承諾させようとする考えである。とすると、先の傍線部「ついでなくてえ聞こえぬ」も、具体的に意味するところは、仲介がいないので正頼への申し入れはできないということであろう。またさらに、「嫗」が連れてきた正頼家の女房の長門にも「父ぬしに申さむとなむ思ふ。申し継ぎたまひてむや」と言う。後に早合点から「嫗」を縛り上げたりもする性急な性格の真菅は、財力にものを言わせて直ぐにでも結婚を決めてしまいたいと思っており、あて宮に求婚するのではなく、正頼に申し入れようとしているのである。兼雅の例からすると姻戚関係にあってもなるべく避けようとするこの方法を赤の他人の真菅がとろうとするのは、やはり奇人だからこそであろう。

関連して、真菅と「嫗」・長門との閲ぎ合いの様相を分析しておきたい。正頼に申し入れようとする真菅に対し、「嫗」は「ことはなほ嫗たばかり聞こえむ。父おとどにもな聞こえたまひそ」と言うし、長門は「おとどには聞こえたまふとも、とみにもならじ。御文賜はりて、あて宮にまゐらむ。」と言っている。そして結局真菅はあて宮に手紙を送るのである。すると、「嫗」と長門は父親に申し入れるような非常識な手段は諫止し、あて宮に求婚する方策をとるように仕向けているように一見思えるが、おそらくそうではあるまい。父親に申し入れるのを阻止しようとするのは、自らは正頼に接触する術がないからで、それでは真菅から礼をせしめられないという打算からくる魂胆であろう。つまり、〈財力で父親を懐柔して性急に結婚しようとする真菅〉対〈父親相手では自分達の出る幕がなくて礼が貰えないので阻止しようとする「嫗」と長門〉（長門は孫があて宮に仕えているので、それを介してあて宮に手紙を送ろうと目論む）という対立が仕立てられ

ているのであるが、この対立を端的に言い換えると、〈非常識な真菅〉対〈打算的な「嫗」・長門〉という対立であると言えよう。つまり、世間の規範的な考えの center からそれぞれ別方向に外れている eccentric 対 eccentric が対立しているのが面白いのである。「嫗」・長門が真菅を諫止するのは、常識的判断からではなく、打算からくるものだと考える所以である。このような分析からして、正頼に申し入れようとする真菅の思惑は、非常識なものとして設定されているとしか考えられないのである。[12] そして、それが非常識なのは、真菅は正頼・あて宮とは血縁関係でも何でもないところに起因していると目されるのではないか。

次に最終的にあて宮と結婚する春宮もみてみよう。春宮は嵯峨の院の巻で正頼に申し入れている。しかし、それより前の今取り上げている藤原の君の巻の七夕の場面では、あて宮の母で正頼の妻でありかつ自らには叔母にあたる大宮にあて宮への恋情を吐露する歌を贈る。大宮は春宮に返歌を贈るとともに、春宮からの手紙をあて宮に転送するので、大宮を仲介にして春宮からあて宮に恋歌が贈られた形になっている。また、七月末にも春宮からあて宮に歌が贈られるが、この時には他の求婚者達からの歌も羅列する形で記述されており、こんな場合語り手は仲介には一々言及しない。仲介がいるのは、言わなくとも当然ということだろう。そこでその後の春日詣の巻を見ると、春宮は「右近少将を御使」にしてあて宮に歌を贈っている。この他の折りにも右近少将が仲介になっているとみてよかろう。もっともこの時には手紙はまず正頼に届けられたようで、正頼が代作した返歌をあて宮が認めて春宮に返している。

春宮について確認しておきたいのは、春宮は結局父正頼に申し入れるが、その前に仲介を介してあて宮に歌を贈っている点である。また、父親に申し入れるについては、春宮は正頼の妻の甥だから姻戚関係にあり、あて宮からすると母方の従兄弟になることが重要な要素だとも思えるのである。もっとも、春宮という立場からすれば、そんなことは考えなくてもよいのかもしれないが。

以上、些少な例からだが、総合して考えてみよう。まずは、数多いるあて宮への求婚者のうちで、父正頼に結婚を申し入れることを考える者はというと、その数が些少になってしまうことからして、父に申し入れるのは一般的ではないと考えられる点を押さえておきたい。その一般的でない方法がどんな場合に求婚者の念頭に上るのか確認しておくが、本文引用並びに論述の部分でも波線を付しておいた所に特に注目されたい。父親に結婚を申し入れるという方法は、実忠のように父親にも本人にも近い血縁関係にある者は真っ先に考えることではあっても、そのような関係にない者はとらない方法だと言えそうだ。血縁関係にないのに父親に申し入れる或いは申し入れようとするのは、上野宮と真菅という常識外れの奇人になる。一方兼雅のように父親と仲がよかったり姻戚関係にあったりすると、父親に申し入れることもあり得たのかもしれない。しかし、本文を見る限りそう考えるのは語り手であって、兼雅の念頭にはない。また、春宮のように父親に申し入れることができる場合でも、仲介を介して本人に歌を贈る方が先に選ばれている。

二　道綱母の思い

さて、以上を参考にして、道綱母の抱いた思いの検討に移るが、その前に念のために申し添えておきたいことがある。右の分析は物語を題材にしたものである。そうすると、最後の春宮の例などは、春宮という立場からすると最初から父親に申し入れて話を付けてしまえそうにも思えるので、わざわざその前に本人に求婚歌を贈るのは物語だからこその設定だとも考えられる。実忠についてみても、その立場からすると父親に申し入れる方が普通なのかもしれないが、ことさらに「父おとどに聞こえたまふとも、許されたまふまじく」という状況を創って仲介を介して本人への申し込みを行わせている。要するに、物語では本人に求婚がなされる展開が求められるのであり、換言すれば、父親に申し入れるという設定は避けられたと考えられる。その点からすると現実離れしてい

ると言わなくてはならないが、若き日の道綱母は現実よりも物語の方を見ていたと考えられるとは、本稿「はじめに」において神野藤の指摘を引用しながら確認しておいたところであり、加えて、注（4）に掲げた拙稿でも繰り返しておいたところである。

また、藤原の君の巻に描かれているのは、身分を上中下に分けると、だいたい上から上への求婚であり、兼家から道綱母への求婚は上から中への求婚であるので、その点を考慮すると一緒にはできないかもしれない。でも、それも、若き日の道綱母はそんな現実的な面を見るより、物語世界に憧れて生きていたと思われる点の方を重視して捉えるべきだと考える。権門の兼家からの求婚であっても、ちゃんとした仲介を介して求婚歌が贈られてくることを夢見ていたであろうと思うのである。[13]

それで、あて宮求婚譚を取り上げての分析結果を参考に道綱母の思いを考えると、兼家が倫寧に申し入れてきたことを道綱母はどう思ったと想定されるであろうか。他人の兼家（遠い親戚にはなるが）が、父親に結婚を申し入れたのは道綱母にとっては異例と受け取られて、不審であり不満であった筈だとまずは考えられる。もっとも、兼雅の例で見られた語り手の見解からすると、兼家と倫寧の仲がよければ倫寧に申し入れることもあり得たのかもしれない。宮中で倫寧と交誼があったと覚しき兼家は、自分は倫寧と親しいと思っていたのかもしれない。[14]でも、兼雅は父親への申し入れは考えなかったことからすると、やはり異例な行動だと思えたと考えられるのである。

しかし、私が考えるに、道綱母にとっては、兼家の立場で倫寧に申し入れるのが異例かどうかよりも、あて宮求婚譚においては結局は本人に求婚がなされる展開が選ばれることがほとんどである点が重要だと考える。つまり、物語を耽読し物語世界に憧れていたであろう道綱母の憧れは、あて宮求婚譚では父親へ申し入れるような展開は避けられて本人への求婚が描かれているところに向いていたと考えるのである。そういう意味からして、兼家が倫寧に最初に結婚を申し入れ

たというのは、道綱母の夢を破るものであったと想定できるのである。

三 道綱母が「便なきこと」と言った件

次に関連して、兼家の倫寧への申し入れに対して道綱母が「便なきこと」と言った事情についても、少し立ち入った試解を示しておきたい。

今道綱母が「便なきこと」と言ったと述べたが、これを倫寧の発言ととる説もあるので、発言者の確認からしておく必要がある。

まず道綱母の発言であった場合だが、その場合にはこの発言の真意をどう解するかで、さらに見解がわれている。即ち、「処女のこうした時の常套語であろう」[15]などとみる説と、身分の違いを気にしての躊躇いや戸惑いの発言ととる説とがあるのである。前者はいかにも印象批評風で根拠は見出しがたい（特に「処女」）と思う。よって、後者つまり身分の違いを気にしての言葉と見做すべきなのであろうか。

一方倫寧の発言だとしたら、例えば左に示した「全注釈」[16]の解などが最も自然である。

家柄がつり合わぬことを理由に、申し出の撤回を求めたのであろう。しかし実際は拒絶ではなく、儀礼の意味での辞退と思われる。

そうすると、道綱母にせよ倫寧にせよ、どちらにしても身分差を慮っての発言であるには違いないことになり、ならば、兼家からすれば身分差など最初から分かり切っているのだから、そんなことを言われても構わずに求婚を続けて当然だ。倫寧・道綱母側からしてもそれを予測できて当然で、「便なきこと」の直後に「といひつるをも、知らず顔に……」などと批判的に書かれているのと合わなくなる。

このように考えてくると、特に父倫寧の儀礼的な発言であった場合は直後の記述がどうしても解せない。一方道綱母自身の発言であれば、批判と言っても実は、「私自身の意向なら少しは尊重されるかもと思ったけれどもそんなこともなく

て……」というような意味合いが籠められていると見做せると考えるのである。

それにしてもである。道綱母の発言であってもやはり身分差の件だけで兼家が求婚を諦めると期待していたとみるのは無理があるように、私は思う。またそもそも、前述の通り、この当時の道綱母は身分差の件などをどれほど考えていたのかからしてが疑問である。さらには、道綱母にしたら、自分に対してではなくて父親に申し入れてきたことには不満でも、求婚そのものを諦めて貰うまで望んでいたかどうかも疑問なのである。

そこで、「便なきこと」に籠められた道綱母の真意として、別の可能性を考える。つまり、この発言は、兼家が求婚歌も託さずに父親に結婚を申し入れてきたところに反撥したものとみるのである。換言すると、物語に見られるように仲介を介して自分に求婚歌が届けられるのを夢見ていた、その夢を破られる思いがしての反撥の発言とみるのである（あて宮求婚譚を見ると、春宮でさえも父親に申し入れる前に求婚歌を本人に届けているではないか、と思ったかどうか）。しかし、周囲の手前そうはっきりと反撥しているとも言えないので、「便なきこと」と一言言ったとみるのである。

さらに言うと、とにかく求婚に対して戸惑っている自分の気持ちが兼家に伝えられれば、兼家は態度を改めてくると期待していたかもしれない。求婚を続けてくるのならば、次には物語に描かれているようなやり方でくるのではないかと。しかしその期待も裏切られて、この後には「馬にはひ乗りたる人して、打ちたゝかす」と騎馬の使者がやって来たという思いが、「といひつるをも、知らず顔に」には籠められていると考えるのは如何であろうか。

そして、本稿冒頭で引用した求婚歌の贈答の後に、兼家は実際に態度を改めたと思うのである。この後で述べるように、当初は身分差から倫寧に申し入れて簡単にことがなると考えていたと覚しき兼家なのだが、道綱母は和歌に強い拘りを持ち、物語にも憧れている女性だと気付き、作歌に力を入れ始めなければならないと気付いたと思うのである。ここにきて

「便なきこと」という道綱母の発言の真意が兼家にも伝わったのかもしれない。というのは、この兼家の態度の変化が求婚歌の後の返歌を得られなかった四首の歌と秋になってから成立する二組の贈答歌それに新枕と結婚成立時の後朝の贈答歌に表れていると見做せると考えるからである。いずれにせよ、その辺りの場面の分析は別稿を期して詳述したい。

ちなみに、結婚成立後はまた兼家からの贈歌はほとんどなくなり、贈答歌で愛情確認をしたいという道綱母の期待は裏切られ続けるのである。

四　道綱母の思いと『蜻蛉日記』の叙述・構文

ではこの道綱母の不満は、『蜻蛉日記』の本文上どのような位置づけになるのか、その点について一言しておく。本稿における説明だけからすると、倫寧に結婚申し入れがあったことへの不満が当時の道綱母の最大の不満で、本文もその不満に焦点が中るように仕立てられているようにも思えるが、実は私はそうは読み取っていない。道綱母の意識の大部分を占めていたのは、和歌（この場合は求婚歌）であり、それがもたらされた方法や求婚歌が書かれていた状態、はたまた求婚歌の出来映えそのものへの不満に焦点が中る叙述がなされていると考えている。その叙述が、本稿冒頭で述べた通り、結婚成立以降に展開する贈答歌における愛情確認がほとんど成立しなくなった上巻前半部の内容を象徴的に先取りして上巻前半部の「序段」の役割を果たしていると見做せるのである。そう考えると、兼家が倫寧に申し入れたことがいかに不満であっても、倫寧には求婚歌は託されなかったであろう点が重要となってくる。道綱母には求婚歌と直接関わらない倫寧への結婚申し入れに焦点を中てるつもりはなく、それは焦点である求婚歌がもたらされる前段階の不満として書かれていると読み取るのである。

それにしても、本稿における考察からすると、倫寧への申し入れに対して抱いた道綱母の不満は相当なものであった筈だと考えられるのであるが、それを後面に置いてまで求婚歌

に焦点を中てたということは、道綱母の和歌・求婚歌への思い入れがそれ程までに強烈であったということの表れである。そんなことも含め、本節で述べたことについては、注（4）に掲げた『国文学攷』掲載論文において詳述している。

五　『蜻蛉日記』下巻の養女求婚譚（付）

以上の検討を進めていくうちに、兼家が倫寧に申し入れるのに、仲介を介さずに直接申し入れたらしい点が気になり出した。そこで参考にできる事例はないかと考えると、他でもない『蜻蛉日記』下巻に載る遠度から道綱母の養女に求婚がなされた顛末が参考になるのであった。この遠度が求婚してきた顛末を取り上げて、兼家が倫寧に申し入れた際の態度や姿勢に関しても考察しておきたい。問題の焦点は、兼家が最初倫寧に申し入れたにしても、仲介を介さず直接申し入れていると『蜻蛉日記』からは読み取れる、その点からどのようなことが想定できるかである。

そこで、また一旦あて宮求婚譚の真菅に戻り、真菅が正頼への申し入れを目論む際に、「仲媒」を介することを考えていた点に着目したい。真菅のこの考えは、先に引いた「嫗」を前にしての坊の帯刀への発言や長門に正頼への取り次ぎを依頼していることから分かる。上野宮が直接正頼に手紙を送っているらしいのとは相違するのである。ただ、この違いは、上野宮は正頼と直接接触できる立場にあったが、中流階級に属するらしい真菅にはそれが不可能だったというところからくると覚しい。[17] ところが、父親に直に接触できるにも拘わらず仲介を介して娘との結婚を申し入れている例が現実にあり、注目される。それが『蜻蛉日記』下巻で道綱母の養女（兼家と源兼忠女との間にできた子）に求婚してくる兼家の異母弟遠度である。以下、『蜻蛉日記』に載るこの遠度からの求婚の顛末を、「養女求婚譚」と呼ぶ。本節では物語を離れて養女求婚譚を主たる分析対象とし、兼家求婚場面の参考とする。

養女求婚譚をみるにあたっては、遠度の異常な面を念頭に

置いておく必要がある。それは、何より結婚適齢期にはまだまだ間がある養女に対して求婚してきたこと自体がやや異常で、しかも結婚成立を性急に望んでいる。加えて、『蜻蛉日記』を読む限りでは、養女に宛てては手紙も和歌も贈っていない。道綱を介しなどしながら、兼家又は道綱母との交渉に終始し、本人に求婚歌を届けるに至る前に、「ひ[18]との妻を盗み取」る不祥事を起こして自ずと沙汰止みになってしまっている。

このような異常とも見える面は、どうやら遠度の政治的思惑に起因するもの（「ひとの妻を盗み取」るは別として）であるらしく、兼家に取り入るためだ[19]とか、兼通に通じていたからだ[20]とか論じられている。あるいは、遠度の狙いは養女ではなくて本当は道綱母であったため[21]であるとも言われる。そのような問題は今は問わないで遠度の求婚方法をみていきたい。そうすると、今確認した遠度の異常な面よりも、養女求婚譚を詳細に検討した倉田実[22]の分析によれば、実は遠度は基本的には常識的で律儀な人間であったらしいことの方を重視しなければならない。

遠度のそんな人柄が表れている場面の一例として、遠度と道綱母の初対面の場面（九七四年四月）を取り上げた倉田の分析を参照する。ここでは倉田の著書の引用のまま本文を引いておく。

助に「もの聞こえぬ[23]」と言ひがてら、暮にものしたり。いかがはせむとて、格子二間ばかり上げて、簀子に灯ともして、廂にものしたり。助、対面して、「早く」とて、縁に上りぬ。妻戸をひき開けて、「これより」と言ふめれば、歩み寄るもの、またたちのきて、「まづ御消息聞こえさせたまへかし」としのびやかに言ふなれば、入りて、「さなむ」とものするに、「思しよらむところに聞こえよかし」など言へば、すこしうち笑ひて、よきほどにうちそよめき入りぬ。

遠度は（略）、礼儀も見せている。傍線部である。寝

殿妻面の簀子に上った遠度は、妻戸を開けた道綱から、これよりお入り下さいと言われると、「歩み寄るもの、またたちのきて」という動作を見せている。ここは底本通りだが、「集成」[24]が「もの」の下の「ゝ」を脱したとするのが妥当であろう。導かれて妻戸から廂の間に入ろうとしたものの、また簀子に戻ったのである。そして、道綱に「まづ御消息聞こえさせたまへかし」と依頼している。来客は、妻戸の前の簀子にいて、主人に案内を通すのが作法であった。遠度は、その通りにしたかったのであり、道綱は安易に導いてしまったのである。有職故実をわきまえない道綱の、最初の過ちの史料となろう。

こんなふうに道綱とは反対に作法や有職故実を弁えていると覚しき遠度は、右馬頭である自分の部下になる右馬助に道綱が就任した（九七四年正月）翌月から道綱を介して道綱母に手紙を送ってくるのであるが、その文面によると、既に養女の父兼家に申し入れていたという。その点は倫寧にまず申し入れる兼家のやり方と共通するのだが、作法を弁えている遠度が、あて宮求婚譚の分析によると一般的ではないと思われる父親への申し入れをまず行ったのは、やはり遠度が兼家の異母弟にあたるからこそであろう。とすると、もし遠度が兼家の異母弟でも血縁者でもなければ―ならば道綱母の養女に求婚することもないであろうが―、予め兼家に申し入れたりはせずに、仲介を求めて道綱母邸に手紙を送ってきたと想像されるのである。

とにかく、遠度から道綱母宛に出した手紙には次のように書かれていた。

月ごろは、思ひ給ふることありて、殿に伝へ申させ侍りしかば、「事のさまばかり聞しめしつ。いまはやがて聞えさせよ、となむ仰せ給ふ」と、承りにしに、いとおほけなき心の侍りけるとおぼしとがめさせ給はむを、つゝみ侍りつるになむ。ついでなくてとさへ思ひ給へしに、司召見給へしになむ、この助の君の、かうおはしませば、参り侍らむこと、人見とがむまじう思ひ給ふるに

数ヶ月前から兼家に求婚の意思を伝えていたら直接あなたと交渉せよと言われたが、「ついでなくて」遠慮していたところ、道綱が自分の部下になったので、以降は訪問するのに人目を気にする必要もなくなったというのである。ここで注目すべきは波線部前後である。遠度は兼家に「思ひ給ふること」を「伝へ申させ」たところ、使いから「事のさま……」との報告を受けたという経緯が見て取れる。問題はなぜ兼家と直接交渉せずに使いをたてたのか、そして、この使いはどういう性質の使いであるのかである。後者については、遠度の従者だとも思えなくもないが、これは真菅が言うところの「仲媒」になるであろう。諸注釈書を見ると、微妙な書き方をしているものが多いが、「新編全集」は「誰か仲介者を通して」、「全評解」は「人に頼んで伝え申させの意」、「集成」と「新大系」[25]は「人を介して」とそれぞれ注していて、どれも身近な従者を遣わしたとは見なしていないようだ。この辺りの書き方は従者を遣わしたにしてはことごとしい書き方（それならば、「思ひ給ふることを殿に申し侍りしかば」でもよいように思う）だと感じるのは、私だけではないと思える。対する兼家は、仲介を介して娘との結婚を申し入れられたら、もう少し違った対応をするのが普通だと思うが、例の豪放な性格をここでも見せて道綱母と交渉せよとあしらってしまったというわけであろう。そもそも兼家は、『蜻蛉日記』の後の記述からすると、この娘にはもうあまり関心がないようなのである。[26]

では、なぜ遠度は異母兄の兼家と直接会って交渉せずに仲介を介したのか。やはりそれは、たとえ異母弟であっても仲介を介するのが礼儀に叶ったやり方だったからだと考えられる。そして、礼儀に叶った手順を踏んでいると道綱母にも知らせておきたくて、手紙には波線部のように書いておいたのであろう。

ちなみに、その手紙を送るのも遠度は道綱が自分の部下になるような機会を待ったりして、必要以上に常識・礼儀を踏まえようとしていたと言えるかもしれない。先に倉田の分析

を参照した道綱母との初対面の時などはまさしくそうである。それが、その後だんだん常識外れの強引さというか苛立ちを見せるようになる。元来律儀な遠度が、兼家の無関心や道綱母の抵抗にあって思ったようにはことが進まないので焦ってきたのであろし、また、そんなに焦るのは、遠度の思惑は単に養女と結婚したいというものではなかったからだとも思えるのであるが、それは本稿では問わない。とにかく、遠度も最初は礼儀に叶った律儀な態度を見せていたと言いたいのである。(27)

ところで、話をまたあて宮求婚譚に戻すと、真菅が正頼に申し入れるに際して「仲媒」を求めたのは、先にも述べた通り正頼と直接接触できないのもさることながら、それが父親に申し入れる際の礼儀に適ったやり方であったと、遠度の例からは考えられる。よって、真菅には選択の余地はなかったとしても、上野宮に視点を移すと、正頼への直接の申し入れをなす上野宮も、仲介を介すべきだったのである。上野宮はどの点をとっても非常識であり、三奇人の中でも一番非常識であるという設定ではなかろうか。

兼家が道綱母に求婚する場面に戻る。本人ではなくて最初に父親に申し入れる場合にも、遠度のように仲介を介する必要がある。どうも兼家はそこのところの手間を惜しんだみたいである。仲介を求めるのは本人に手紙を届ける際にも必要なのは勿論だが、兼家は、本稿冒頭引用文中にある通りこの後で道綱母に手紙を届けるにあたっても、騎馬の武官(28)を遣わしている。こんな兼家の態度は、「家柄の低い受領層の家に、そんなに手続きをうるさく考える必要はない」(29)と思ったことからくる可能性が充分に考えられる。ちなみに、『竹取物語』を見ると、五人の求婚者達は竹取の翁を家の外に呼び出して交渉している。これなどはまさしく求婚者達と竹取を生業としていた翁との身分差の為せる業とみてよかろう。「親とおぼしき人に、たはぶれにも、まめやかにも、ほのめかし」たというのは、そんな事例すら周囲には思い起こさせたかもしれない。とすると、中に「たはぶれにも」が加わっているのは、さすがの兼家もこのやり方に幾分は引け目を感じていた

ということの表れである可能性も考えられる。

遠度求婚譚を参考にすると以上のごときことが指摘できるわけだが、それに第一・二節での検討も加味すると、道綱母よりむしろ兼家の思惑が透けて見えてきたようだ。要するに従来の指摘通り、兼家は求婚の手続きを省いていったのである。

最後にまた道綱母の思いについて触れておく。私は、本稿冒頭で示した新典社新書の題名で言えば「和歌を力に生きる」道綱母の姿を昨今追っているのだが、道綱母が和歌に拘っていようがいまいが、はたまた物語に憧れを抱いていようがいまいが、兼家が倫寧に仲介も介さずに結婚を申し入れてきたことに不満でなかった筈はないと、本節の検討からも言えると思う。むしろ私の想定とは逆に道綱母が現実社会を直視して生きているような女性であれば、兼家のとった求婚手続きに対する不満はより強かったのでないかと思うほどである。しかし、道綱母は言わば特殊で、そんな手続きの不備の点よりも、とにかく和歌や物語に拘りを抱いて生きており、その拘りが『蜻蛉日記』からどう読み取れるのかを探っているわけであるが、話がまたもとへ戻ってきたので、この辺りで稿を閉じることにする。

【注】

(1)二〇〇九年一〇月。

(2)ここで述べたことに関して、特に「『蜻蛉日記』上巻の「返し、いと古めきたり」考―道綱母と兼家の贈答歌の問題を中心に」(本誌16号・二〇〇八年一二月)でも詳細に検討している。

(3)『蜻蛉日記』の引用は、特に断らない限り、宮内庁書陵部蔵桂宮本を底本とする柿本奨『角川文庫蜻蛉日記』(一九六七年一一月)による。波線は、引用者。

(4)「『蜻蛉日記』上巻前半部の「序段」としての求婚場面―鈴木隆司論への疑問とともに―」(『国語国文』82巻10号・二〇一三年一〇月)、並びに「『蜻蛉日記』兼家の求婚歌到来の場面・追考―上巻前半部の「序段」としての役

割―」（『国文学攷』223号・二〇一四年九月）。

（5）「蜻蛉日記と物語文学」（『一冊の講座蜻蛉日記』一九八一年四月・有精堂）。傍線・波線は、引用者。

（6）中野幸一「源氏物語に見える昔物語―前期物語の性格―」（『むらさき』8・一九六九年一二月）に有益な考察がある。

（7）道綱母が藤原の君の巻を読んでいたのではないかと言うのは、三谷榮一「藤原君巻の増益」（『物語史の研究』（一九六七年七月・有精堂）「第一篇物語の黎明　第三章宇津保物語―成立事情とその増益―」）など古くから指摘がある。『蜻蛉日記』下巻天禄三年八月に、「くつ〳〵ぼうし、いとかしがましきまで鳴くを聞くにも、「我だに物は」といはる。」という一節があり、ここにある引歌表現が、藤原の君の巻に見える三の宮の歌「御前近き松の木に、蟬の声高く鳴くをりに、かく聞こえたまふ。／かしがまし草葉にかかる虫の音よわれだにものはいはでこそ思へ」を引いていると考えられることを根拠としている。

（8）三上満「宇津保物語・藤原の君巻の方法―貴宮求婚譚発端の構造―」（『国文学研究』84・一九八四年一〇月）や、中野幸一『うつほ物語の研究』「Ⅲうつほ物語の創造と方法　第五章うつほ物語の構想と構造　二藤原の君の巻の原初構想(3)求婚物語の第二段階」（一九八一年三月・武蔵野書院）に指摘がある。ただ、あて宮の実兄の仲澄という特殊な例を除けば、兵部卿宮も三の宮も皇族であるのも気に掛かる。皇族ゆえの行動様式かもしれない。

（9）『うつほ物語』の引用は、尊経閣文庫蔵十三行本を底本とする中野幸一『新編日本古典文学全集うつほ物語①』（一九九九年六月・小学館）による。傍線等は、引用者。

（10）この「嫗」に関し、新編日本古典文学全集と底本を同じくする（注（9）参照）室城秀之『うつほ物語全改訂版』（二〇〇一年一〇月・おうふう）は、「底本「女」は、「嫗」の意。」と注している。

（11）「せうもち」が何を指すかは不明であるが（或いは誤写か）、「贈らしめて」とあるから、何か贈り物で懐柔しよ

うとしているのは確かだろう。

(12)石母田正「『宇津保物語』についての覚書―貴族社会の叙事詩としての―」(『歴史学研究』115、116・一九四三年。後、『戦後歴史学の思想』(法政大学出版局・一九七七年三月)及び『石母田正著作集十一巻』(一九九〇年二月・岩波書店)に所収)、野口元大「うつほ物語の世界とその文学史的意義」(『古代物語の構造』一九六九年・有精堂)、中野幸一「藤原の君の巻の原初構想」(『うつほ物語の研究』一九八一年・武蔵野書院)等は、三奇人の設定には当時の貴族への批判が籠められていると主張する。ここでの真菅と「嫗」・長門の対立的構図も、〈非常識〉対〈打算〉などと捉えてこそ貴族社会への批判性がより強まると考える。

(13)当時の貴族の結婚には、現実には父親同士で話を付けてしまう形のものも多かった筈だが、道綱母の念頭にあったのは、男から懸想されて懸想文・求婚歌が贈られてくるという形であろう。

(14)川口久雄『日本古典文学大系土左日記かげろふ日記和泉式部日記更級日記』(一九五七年一二月・岩波書店)は倫寧について「天暦五年、中務少丞、昇殿。右馬助、右兵衛佐にも任ぜられているから、天暦三年に昇殿し、同五年右兵衛佐に任じた兼家とは役目の上でも交渉が深かった。」と注している。兼家と倫寧に役目柄以上の交誼がなかったとも限らない。

(15)秋山虔、上村悦子、木村正中「蜻蛉日記注解二」(『国文学解釈と鑑賞』27巻7号・一九六二年六月・至文堂)。

(16)柿本奨『蜻蛉日記全注釈上巻』(一九六六年八月・角川書店)。

(17)上坂信男「御春高基と滋野真菅」(『古代物語の研究―長篇性の問題―』一九七一年三月・笠間書院)は、高基と真菅の共通点の一つとして、「あて宮=正頼への知るべなくて便りを贈れないので未知の人を媒介者とする。」を挙げている。

(18)桂宮本は「ひと」の所が「もと」となっているが、角川

文庫本（注（3）参照）のように「ひと」と校訂する注釈書が多い。「もと」なら、今は他人の妻となっているの元の妻という意味になるであろう。

(19)岡一男『道綱母』（一九四三年九月・青悟堂）。

(20)川村裕子「遠度求婚譚をめぐって」（『立教大学日本文学』52・一九八四年七月。後、『蜻蛉日記の表現と和歌』（一九九八年五月・笠間書院）に所収）。

(21)上村悦子『蜻蛉日記解釈大成8』（一九九四年六月・明治書院）。

(22)『蜻蛉日記の養女迎え』（二〇〇六年九月・新典社）。以下、倉田実の論に言及する際は、すべてこの著書による。

(23)ここは倉田の著書では「ぬ」となっているが、同著が底本とする桂宮本では「む」となっている。「む」の誤植とみられる。

(24)「集成」は、犬養廉『新潮日本古典集成蜻蛉日記』（一九八二年一〇月）を指す。

(25)ここで略称を用いて示した注釈書について列挙しておく。

●「新編全集」―木村正中、伊牟田経久『新編日本古典文学全集土佐日記蜻蛉日記』（一九九五年一〇月・小学館）。

●「全評解」―村井順『かげろう日記全評解下』（一九七八年一月・有精堂）。

●「集成」―注(24)参照。

●「新大系」―今西祐一郎『新日本古典文学大系土佐日記蜻蛉日記紫式部日記更級日記』（一九八九年一一月・岩波書店）。

(26)守屋省吾「蜻蛉日記下巻の研究と解釈」（『一冊の講座蜻蛉日記』（注（5）参照））、同「蜻蛉日記下巻考―遠度求婚の経緯をめぐって―」（『論集日記文学日記文学の方法と展開』一九九一年四月・笠間書院）参照。

(27)このように礼儀作法に適う遠度の求婚方法は、物語で描かれることは少ないであろう。あて宮求婚譚で検討した通り、物語で詳述されるのは、男が懸想してというような恋愛から始まる結婚だと思われる。

(28)この使者は兼家の随身の武官であるとの指摘が「全注釈」（注(16)参照）などにある。時に兼家は右兵衛佐であった。

(29)増田繁夫『蜻蛉日記作者右大将道綱母』（一九八三年四月・新典社）で示されている考え。

〈付記〉

本稿の校正中に、倉田実氏より『王朝の恋と別れ―言葉と物の情愛表現』（二〇一四年一一月・森話社）をいただいた。「懸想文の「言ひ初め」」の問題や「求婚相手宅での「居初め」」の問題など、本稿でも検討すべき多くの問題が含まれていたが、その検討は後日を期する他ない。倉田氏には、御礼並びにお詫び申し上げます。